御子柴先生のこと

泉　利明

バルザックは、人間の名前と性格が結びついていると信じていた。ドストエフスキーは、登場人物の名前にあれこれ工夫をこらした。御子柴道夫という名前は、こうした大作家の主張の例証となるのではないか。先生は、「御」にふさわしい何やら由緒正しいところがあり、「子」どもらしさを忘れておらず、「柴」が喚起するような鄙びた雰囲気も漂わせている。ロシア思想という「道」を追及され、素晴らしい「夫」であることは、何度も実感する機会があった。バルザックやドストエフスキーがもし日本人作家なら、御子柴道夫という名前を思いついて、大喜びしたかもしれない。

私は教養部解体の二年前から千葉大で働きはじめ、外国語センター設立以降は、小所帯となったおかげで、先生と研究室や酒席で頻繁に接することができた。そうした付き合いを通じていつも感じていたのは、研究対象と先生の人格の結びつきの強さである。しかもその対象は、作家個人でも、一時代の思想でもなく、11世紀から20世紀初頭までの「ロシア・インテレクチュアル・ヒストリー」(『ロシア宗教思想史』) という壮大なものである。

先生の著作を読み返してみて、門外漢の私には到底理解できたとはいえないが、フランスとの比較で気づいたことがある。フランスでは、哲学、文学、宗教、歴史は、もちろん別々のものではないが、それぞれが独自の輪郭を持っている。たとえすべてを含めた「フランス・インテレクチュアル・ヒストリー」が書かれたとしても、それぞれの分野はやはり、個人名とともに、ある程度は区別されているだろう。しかし御子柴先生の著作では、こうした要素がすべてドロドロと溶けあい、渾然となったものとして提示されている。

そして、これほど広い範囲にわたりながらも一体化されたロシア思想の全体像は、御子柴先生の頭の中にのみ、存在している。『ロシア精神のゆくえ』は、ある面では先生のロシア滞在記である。著者は、自分の研究の成果を現地で確認するため、ロシアのあちこちを訪れる。しかし、もちろんこれは、通り一遍の旅行記ではない。そこで対面しているのは、先生の頭の中にあるロシア思想全体と、現在のロシアの背後に隠れ潜んでいるロシアの伝統の全体である。この二つが対峙する中から、途方もなく豊かなロシア精神が浮かび上がってくる。先生は、何かを発見するためにロシアに行ったのかもしれないが、逆にロシアが、先生によって発見されているのである。この著作が発表されたのが1993年で、先生がまだ47歳くらいのことであるのに、今更ながら驚かされる。

この本を締めくくるのは、知人からの次のような言葉である。「ミチオ、日本に帰らずにここに永住しろよ。そうしたら、ロシアがどこにすっとんでいくか解るかもしれんよ。」おそらく先生の興味は、政治的大国としてのロシアではないだろう。1993年からすでに様々

な事件が起きているが、先生は、自分が追いかけてきたロシア思想がどう変質していくのか、若干の不安を抱きながら見つめておられるのではないか。私としては、こちらにも多少は馴染みのある文学者についての先生独自の見解も含めて、ぜひ続編を書いていただきたいと期待している。